

奈良時代唐式鏡の諸問題

—唐式鏡資料の整理を通して—

序 説

我古代史上の一つの大きな特色は、精神史の分野に於て鏡鑑が非常に大きな意義を持つことである。中国より我国北九州方面へ鏡が初めて渡来して来たのは、略弥生式時代に遡り得るが、それ以来、鏡鑑は我国に於ても非常な普及を遂げ、我国銅器の中心的存在とはなつた。その鏡鑑隆盛の一頂点は古墳時代であつた。鏡鑑は、古墳の副葬品の内でも特に不可欠の物と考えられたようで、前方後円墳以下の高塚と鏡の結び着きは、想像以上のものがある。考古学の一方法論として、古墳に副葬された鏡を編年集成し、そこに得られた尺度を以つて古墳自体の編年を行わんとする方法が執られたのも、実にこの為である。

ところがその故であろうか。従来我考古学に於て特に重視し研究が進められていたのは、主として漢六朝鏡であつた。けれども、古墳時代後期になると、この漢六朝鏡は漸く下火となり、やがて大化改新以後には、新に唐式鏡があ

齋 藤 孝

らゆる方面に活躍を開始し、遂に漢六朝鏡の伝統を完全に払拭し去るに至つたのである。従つて、後期古墳における唐式鏡にも、等しく研究の目が向けられねばならない。

然るに我国に於ける唐式鏡と云えば、真先に彼の正倉院御物鏡を念頭に浮かべ、それ等の鏡を通して奈良朝時代美術工芸の水準を推測すると云う、工芸史的見地の研究が多かつたのではあるまいか。^(註1)しかし、正倉院鏡の殆んどが実は唐からの舶載品であつて、それ等が必ずしも当時の我邦の工芸水準を物語る物では無いのである。^(註2)故に我国唐式鏡の性格を究明するには、広く日本各地に出土し、或は伝世されている鏡を集成し研究する必要がある。

さて、ここに云う唐式鏡とは、中国唐代に行われた様式の鏡の内我国に舶載された物、及び、舶載鏡をそのまま原型に用いた我国に於ける踏返品、乃至舶載鏡の背文そのままに準拠して意匠し鑄造された仿製鏡を指している。従つて背文文様や鏡胎の上からは、中国本土と我邦彼我の様式に殆んど差異の認められぬ物である。そこで我唐式鏡の

様式問題を取扱ふ為には、先に中国唐代の鏡鑑編年史が確立されていなければならぬ。ところが、戦前から知られているこの種の資料は、その多くが中国本土に於て盗掘の上、欧米や我国の収集家の手に渡ってしまった物で、個々の鏡の製作年代や使用時期を明示する証拠が殆んど失われてしまっている物ばかりと云つて良い。あまつさえ唐式鏡の本来の性格として、漢六朝鏡の如き紀年銘を持たないと云う欠陥が有り、以上のような理由で、一部先学の手によつて様式体系の粗筋は推定されているとは雖、³⁾数々の障害が唐鏡様式の編年を大きく阻害し、今後に残る諸問題は未だに山積していると云うのが実情である。又たとえ唐式鏡の様式編年が完成したとしても、東洋史の一端としての唐代鏡鑑史を決定づける力は大きいとしても、それがそのまま日本に於ける唐式鏡の推移を拘束することが出来るか否かは、にわかに決し難い。何故ならば、中国本土に於ける推移通りに、唐式鏡が製作時期の順に我国へ舶載され、我邦でもその通りに行われたと云う証拠が無いからである。その点は寧ろ、中国に於て唐式鏡が完成されて後、或る年代以後に、背文様式に拘らず「唐式鏡」と云う広い概念の下に輸入されたらしい形跡すら窺えるのである。以上の理由で、私が今回ここに取り上げる問題は、唐式鏡その物の我国に於ける様式史ではないことを予め御断りしておく。それよりも、唐式鏡が我国に存在したと云う事実に当つて、我日本史上に如何なる歴史的意義を持つかと云う点について、私見を述べたいと思うものである。

唐式鏡の内、特に我国に於ける出土品については、後藤守一博士が以前に整理を試みられたことがあり、⁴⁾石田茂作博士が図版の集成を行われた。⁵⁾戦後は梅原博士が、中国出土の唐式鏡を整理される一方、日本出土鏡にも注目されて⁶⁾数々の新資料の紹介も行われている上に、⁷⁾個別的な発見報告も諸氏の手によつて各誌に報ぜられ、こうした諸先学の御努力によつて、現物資料は着々と積み重ねられつつある。けれども、我国に於ける唐式鏡の実例は、古墳時代以前の漢六朝鏡の出土数には到底比較にならぬ程少なく、又遺跡それ自体の性格が不明確な為、その製作年代や用途の不明瞭な鏡が極めて多く、ここに掲げた「唐式鏡の日本史的意義」と云う命題を完全に掘り下げ得る資料さえ、必ずしも十分に発見されているとは云い得ないのである。しかし、だからと云つて、この問題を全く等閑に附しておくべきである⁸⁾と云うことは一致しない。矢張り何等かの手懸りをつかみ、少しでも前進を計るべきであらう。以下に述べる愚論が、その寸歩の前進に価する所があれば幸甚である。

古代精神上の鏡に関する研究は、主として記紀を中心として進められる関係上、一般に大化前代の鏡の意義が重視されてきたようである。特に従来より三種の神器に抱括された鏡の問題を中心として、祭政一致の我氏族制時代に於ける鏡の呪術的政治的意義が究明されて行つたことは、⁸⁾考古学上の成果と相待つて、歴史の大きな一頁を明かにし

た。一方平安時代以後に発達して来た和鏡に於ては、服飾化粧料としての実際の機能を具体的に示す史料が明らかに成つて来るし、それと共に精神史上に働きかける鏡の数々も指摘される。神祇的には御霊代としての鏡が一層普遍化すると共に、神仏習合思潮に基き、神の本地仏を鏡面に観る御正体鏡の出現をうながし、仏教的には密教修法の壇鏡、経塚への埋納鏡が多く見出され、特に個人の祈願を鏡に託して神仏に供養する風も盛んであり、法隆寺西円堂⁽¹⁰⁾、三河鳳来寺の鏡堂⁽¹²⁾の如き厩大な量の奉納鏡となつて現れ、その外我固有信仰と仏教との特殊な結びつきとして、出羽神社の池中投入鏡等異色のな使用方も明かにされている⁽¹³⁾。そして同時に於てすら、鏡は実用面はさることながら、かかる宗教的用途の故に熱意を籠めて盛に生産されたようにすら感じられるのである。それではこの兩者の中間に存在する唐式鏡時代の鏡は如何なる歴史的意義を帯ていたろうか。ここに述べるのはその一考察に外ならない。

しかしながら、唐式鏡のこの問題も、ほんの短期間の研究では到底全てを究め尽せるものではない。従つてここに説くところも結局はほんの原則論に触れるに止つてしまつたことは、私の浅学の致す処で自ら恥ずるものである。ただ今後の考を進めるに当り諸先学の御示教に預かれれば幸である。

この稿に於ては、先ず我國の唐式鏡の实例を用途別に整理し、そこから派生する原則的問題の二、三について私見を述べ、唐式鏡の研究に入るべき基本的立場を明らかにし

たいと思う。なをここに云う奈良時代とは、政治史に云う和銅の平城遷都から延暦の長岡京遷都迄の期間を云うのではなく、文化史的には、唐文化摂取の風潮を背景として唐式鏡が盛に舶載され使用された時代、政治史的には律令制隆盛時代であり、所謂奈良時代を中心とするその前後を含めた可成り広い概念として用いていることを最初に御断りする。

(註)

1 一例を上げれば香取秀真氏「奈良時代の金工」(東洋美術誌特輯日本美術史寧楽時代)では、正倉院蔵の各種の金工品に用いられている技法を分析されると共に、それ等が又当時の奈良時代に於ける我邦人間にも既に習得されている技術と見做され、正倉院蔵の鏡も、天平宝字六年の「東大寺鑄鏡用度注文」及び鏡背の下絵が正倉院文書に残っていることから、当時我邦に於て立派に唐式鏡が製作されている以上は、正倉院蔵鏡の多くは奈良朝の製品と考えて差支無く、それは又奈良時代工芸技術の優秀性を示すものに外ならぬ。と云う見解に立たれている。

この鏡に限らず、奈良時代工芸史の多くが正倉院御物の品々を代表させて説かれて来た傾向があるのではなからうか。

2 少なくとも正倉院御物鏡の大半は、我邦製作の根拠の殆んど無いものであり、寧ろ唐よりの舶載品と観るべきであると云う警告は梅原末治博士も強く提唱されている。「正倉院の御物鏡について」(書陵部紀要7)参照。

3 梅原博士「唐鏡大観」、後藤守一博士「古鏡聚英」下巻等によれば、この点は未だ明確には論じられてはいないようである。

この様式編年原則論として、一つの試論を打ち出されたのは矢島恭介氏「唐鏡の図紋と形態について」(国華六五六、六五七号)「唐鏡の形態について」(考古学雑誌34の6)であろう。これ等はまだ問題も多いことではあろうが、この稿では、その基本体系を矢島氏説に準拠した。

4 「本邦出土の唐式鏡」(考古学雑誌21の12)

5 「天平地宝」

6 「唐鏡大観」

7 「本邦出土に係る唐式鏡の新資料」(史迹と美術二〇一号)

8 「近時所見の本邦での唐式鏡」(古代学1の3)

9 例えば「源氏物語」すゑつむ花の巻に、

御びんくきのしどけなきをつくろひ玉ふ。わりなふゝるめきたるきやうだい、からくしげ、かゞみのはこなどとりいでたり。云々

等とあり、「春日権現験記」第三卷、知足院殿が女房に御扇を賜う図中に、所謂根古志形鏡台に鏡が懸けられている様が見える。

10 更科日記に

一尺の鏡をいさせて、えゐて参らせぬかはりにとて、僧をいでしたて、初瀬にまうでさすなり。三日さぶらひて、此人のあべからんさま夢にみせ玉へなどいひてまうでさすなり。云々

「新古今和歌集」に、藤原経衡が筑前守在任中祈雨の為に竈門神社に鏡を奉納した時の歌として、

雨降れといのるしるしの見えたらば、水鏡とも思ふべきかな

と云うのがある。

11 広瀬都巽氏「法隆寺西円堂伝来在銘古鏡」(考古学雑誌6の10)

12 小栗鉄太郎氏「三河国鳳来寺の奉納鏡に就いて」(史迹と美術九六号)

13 「羽黒山古鏡図譜」参照
(追記)

先述の如く、ここに行う資料の整理は様式分類ではなく、用途別に整理したものである。又、それは現在在我国に存在する全ての唐式鏡を取り上げているのではなく、単に個人、又は博物館の所有と云うだけの物は除外してある。ここで必要なのは、その鏡が少なくとも何等かの意味で我日本史上に意義を持ったと考えられる物だけだからである。しかし、ここに上げた資料も、短期間に私の知り得た範囲に止って居り、該当の鏡でありながらも、或いは遺漏の分が有ろうかと思われる。その点はどうか御寛恕を仰ぐと共に、大方の追加御訂正を御待ちする。

第一章 墳墓と唐式鏡

奈良朝の唐式鏡の用例を考察するに当っては、前代との関係に於て、古墳に如何なる方式で副葬されているかを先ず観なければならぬ。以下に管見に及ぶ処を示そう。

(1) 金銀平脱双鳳鏡(京都市東山区山科西野山町宇ヶ谷墳出土・京都大学蔵)

径一八・二釐。我邦出土金銀平脱装鏡の唯一の例。素円紐の周囲を二羽の鳳凰が周る。此と近似する中国出土品を、撰津の黒川福三郎氏が所有されている。遺跡は堅穴

石室で、随伴遺物に皮革製鏡奩残欠一括、金装大刀一口、刀子一石、石帯の銚十数個、硯一面、水滴一個、鉄鎌十数個、木棺用と思しき鉄釘数十本、墓誌板らしき鉄版二枚等がある。Ⅱ参照・京都府史蹟勝地調査会報告第二冊

(2) 唐草狻猊背方鏡 (京都市右京区松尾下田町字桜谷古墳出土)

一辺長一三・四五釐、獸鈕を中心に、上方左右に對向する狻猊、又、下方左右にも對向しつつ階び降りんとする狻猊を鑄出し、空間を唐草と、狻猊の各口より吐かれる雲気によって意匠化した見事な背文を持つ。遺跡は、地下一米に木炭の詰った土壙があり、一応墳墓らしいと云う。遺物は無い模様。Ⅱ参照・後藤守一博士「本邦出土の唐式鏡」(考古学雑誌21の12)及び石田茂作博士「天平地宝」

(3) 双鸞狻猊背六花鏡 (京都府乙訓郡向日町物集女字長野古墳出土)

径一四・八釐。素円鈕の左右に双鸞相對し、上下に狻猊が馳驅する。その間に適当に草花文を配してある。木炭を充填した土壙の中央やや北寄りから出土。遺物に須惠器瓶二個、丸玉二個、釵子二個、鉄釘一括等がある。Ⅱ参考・京都府史蹟勝地調査会報告第四冊

(4) 禽獸葡萄鏡 径九・八釐

(5) 金銅鈕鉄鏡 径一九・一釐

(以上、奈良県高市郡高取町松山古墳出土)

遺跡は横穴石室。遺物は木棺の鏝座と釘、須惠器、太刀等あり。外縁には細かい雲文を配列し、外区は例の如く葡萄唐草と随所に鳥を配す。突帯には珠文をうち、内区の

獸は四獸で、外に獸鈕がある。これは紀伊ユルベ浜出土鏡と同一背文である。Ⅱ参考・梅原未治博士「大和国高市郡松山の葡萄鏡出土の古墳」(歴史と地理11の2)

(6) 麟鳳八稜鏡 (宝塚市白中筋古墳出土)

径一二・八釐。遺跡の性質は不明なるも、須惠器の脚付長頸埴を伴出し、原史時代の古墳に似た様式の墳墓らしい、と云う。鏡は内外両区に分れ、外区は地に魚子をうって各稜に合せて八個の花文を置き、内区は素円鈕の左右に二鳥對し、上下に雲氣を立てた靈獸がある。全体に文様が漫漶で、意匠も退化の跡あり、我國の仿製品かと思ふ疑も感じられる。Ⅱ参照・天平地宝、及び後藤博士前掲論文

(7) 花枝双鳳八花鏡 (兵庫県宍粟郡城下村大字金谷字湯船口古墳出土)

径一〇・九釐。外区に花卉、飛雲を交互に並べ、内区は素鈕の左右に對向せる二鳥あり、下方に鳥の止まれる花枝らしき文様、上方には煙霞の重なりかとおぼしき図紋があるが、此も全体に文様が不鮮明である。同一背文品が大津市南滋賀と、三重県桑名郡多度村多度「山ノ神」趾より出土している。伴出品に金銀環各一個、須惠器等があり、墳墓か。Ⅱ参照・(6)に同じ。

(8) 伯牙彈琴鏡 (岐阜県可児郡中村字中長瀬山古墳出土)

径一七・一釐。図紋は複雑で、鈕の左方に竹林を背にして高士が坐し、膝に一面の琴を按じて弾じつつある趣に窺える。高士の前に置かれた案には、数巻の巻物が乗っ

ている。これに対応する右方の図は一羽の鸞が岩上に舞降りたところである。鈕の上方は靈山に雲霧が手曳き、その下に鶴が一羽右方へと飛翔する。鈕の下には靈池が在り、四個の奇岩が突出するその中央より、一本の蓮葉の茎が上に向って伸び、その先に大きく広がる蓮葉を鈕座とし、葉の中央に止る靈龜を以って鈕としている。これ等の周圍を銘帯が取巻き、次の如くに読まれる。

『鳳凰雙鏡南金裝。陰陽各為配。日月恒相會。白玉芙蓉匣。翠羽瓊瑤帶。同心及心相親。照心照胆保千春。瓊。』
この図紋を持つ伯牙彈琴鏡は、日本では数面ある。(或は同范かと思われる鏡が各地から出土しているが、それは何れ折に触れて述べる)。この鏡の出土遺跡は横穴石室ではないかと云われ、伴出品に須恵瓶、及び須恵碗、外に刀装具もある。又、瑞花双鳳五花鏡と思しき鏡も出土したと云うが不明確である。|| 参照・森本六爾氏「美濃に於ける仙人彈琴鏡出土の一古墳」(考古学雑誌15の11)

(9) 花枝双蝶八花鏡 (静岡県志太郡梨村下ノ郷字半谷古墳出土) 径七・四釐。内区に二羽の蝶と二本の草花を鈕を境に向させ、外区は帯の外周に八個の雲文を繞らす。同質品と考えられる物が志摩八代神社に在り、又同一文ながら下地に魚々子を打ち、且つやや小型の物が、興福寺金堂基壇下、及び秋田県四ツ小屋村の墳墓より出土し、正倉院と志摩八代神社に蔵されている。この鏡を出土させた遺跡は復原径二〇米の円墳かと云うが、内部構造は不明である。地下二尺より出土し、附近より須恵器片も発見

されたと伝える。|| 参照・後藤守一博士前掲論文

(10) 方格四獸鏡 (福島県郡山市大善寺古墳群内出土・新国西新氏蔵) 径一八・五釐。出土は明治三十年頃と云うから、遺跡の性質は不明。背文は、円鈕に一種の獸座があり、その周圍に方格が繞って鈕座区を成す。内区の主要文様は、鈕座方格の四隅に対応してV字形を配し、四方に神獸を飾る。外区は銘帯を成し、次の如き銘文がある。

『靈山□宝神使觀炬。形円晁月光清夜珠。玉台希世紅庄 応図。千嬌集影百福来快。』

図紋や鏡胎は純粹の唐様式であるよりは、寧ろ隋鏡に近い。故桑名鉄城氏藏鏡に鈔上りの良い同范鏡が存すると云われる。|| 参照・梅原博士古代学誌論文

(11) 花枝双蝶八花鏡 (秋田県川辺郡四ツ小屋村小阿地古墳出土・武藤一郎氏蔵) 径六・九釐。木炭を充填した土墳より出土し、刀装具、蔽手刀、骨壺、馬具、斧頭、須恵器等を伴出したと云う。

鏡は興福寺基壇出土、正倉院藏鏡と全く同一で同范かと思われる。|| 参照・後藤守一博士「東北地方に於ける奈良時代の一墳墓」(考古学雑誌13の4)

(12) 鳥獸葡萄鏡 径一一・一五釐

(13) 同右 径九・九釐

(以上、福島県八女郡星野村真名子古墳出土・国立博物館蔵)

(12)は内区の獸が五獸、(13)は四獸であるが、兩者共外縁に小雲文を配列し、突帯上に珠文を打ち、外区の蔓唐草や鳥、又内区の獸等の表現にも似通った所がある。但し、

(13)の方が背文も鮮明であり、質の良い白銅鏡であるのに對して、(12)は獸鈕の形を失い、他の文様も鈍くて、我邦の踏返品ではないかと云う疑が持たれている。遺跡も不明確であるが、墳墓らしいとも云われる。|| 参照・後藤博士考雜21の12論文、及び「天平地宝」等参照

以上の諸例について考えるに、唐式鏡を出す墳墓は大體にして遺構その物が不明確な例が多く、又可成明瞭な場合でも、古墳時代の古墳内部から觀れば極めて貧弱で、古墳もその最末期の様相を如実に示している。一般に墳丘が殆んど消失し、石室があったとしても一種の堅穴を掘って設けたようで、更に石室さえ消滅して、土壙に木炭を詰めただけのものが多い。棺は主として木棺のようで、火葬骨壺の場合もある。出土品としては須恵器と大刀類が比較的普遍化している。中でも山科西野山からは金装大刀、秋田県四ツ小屋からは藤手刀等と新文化を立証する資料が含まれて居り、硯に水滴等の副葬品は、前代には全く無かつたものである。その一方旧様式の鉄鏃や馬具等も伴出することは四ツ小屋に例があり、静岡県葉梨村の例では、復元徑二〇米と云う墳土を持ちながら、須恵器の中に糸底を持った物が含まれている等、如何にも古墳末期らしい新旧の混乱が認められる。

そして此等から出土した唐式鏡は、隋以来の伝統を持った四神十二支生肖鏡、方格四神鏡、團華鏡、古式の鳥獸葡萄鏡等は殆んど無く、大半が本格的な盛期の唐式鏡である。ところが現在の考え方では、中国に於て唐式鏡様式が

全て完成し、その旺盛な時期を画するのは、まず高宗の後半から則天期と觀るのが妥当のようである。(2)その間は、本朝では大體天智、天武朝から元明朝にかけての時期である。そして、それ等が我国に伝えられ、更にそれが直接に又はその踏返品が地方豪族の間へ流布される時間は、相当に長期を要すると考えねばならぬ。故に、此等の鏡を出土させた古墳は、遺構や遺物中に旧来の様式をなをも保持するものが有つたとしても、奈良時代を遡って築造された墳墓は案外に少ないのではなからうか。換言すれば、此等の古墳は奈良時代でも比較的保守的な墳墓であり、唐式鏡が墳墓に納められるのは、旧来の埋葬意識の残影ではあるまいか。後藤博士は、唐式鏡の副葬は旧来の呪術的意義は全く見失われ、寧ろ服飾品として納められたものではないかと推測されたことがあつた。しかし、例えば向日町長野の古墳では、双鸞俊腕六花鏡が土壙の中央北寄り、あたかも遺体の頭部乃至胸部と思しき所に置かれていたのは、或る程度伝統的意識の痕跡をも認め得るのではあるまいか。

又、仮にそれ等が実際に服飾品であつたとしても、この副葬品としての新しい意義付けによつて、奈良時代墳墓に唐式鏡が増々積極的に副葬されて行つたのかと云えば、実は決してそうではない。逆に、奈良時代に於いて鏡の強い副葬意識は殆んど見られないのである。しかもそれは既に古墳時代後期の横穴式石室採用時代より助長されて来た傾向であつた。あまつさえ、大化の薄葬令以後仏教の影響によつて中央では火葬の風が流行し、これが大々的な副葬品

の意義を根本的にくつがえしたのである。そうならば当然鏡は墳墓から姿を消さねばならなくなる。漢式鏡時代では鏡は古墳にこそ何十面となく副葬される物であった。ところが、唐式鏡時代では、ここに示した如く普通は一面のみの副葬であつて、多くとも二面を越えないのみならず、奈良時代墳墓も数ある中で、唐式鏡の出土例は私の管見に入つたものではあるが以上の如く少数である。けれども、それが唐式鏡の絶対量が少ないことを意味するのでは決つてない。とすれば、唐式鏡は墳墓からは閉め出されて行きはしたが、漢式鏡にはない新しい意義を以つて、別の新たな方向に用いられて行つたことを物語るのである。

(註)

1 唐鏡大観

2 矢島恭助氏前掲論文

第二章 神祇と唐式鏡

我固有信仰上に於ける鏡の位置は今更述べる迄もないが、それにあつて唐式鏡の果たした役割を考えてみる時、この唐式鏡が御霊代、又は神宝として神社に厚く伝世されているか、一種の祭祀遺跡と考えられる場所から出土すると云う事例が、相当数存在していることを見逃してはならない。以下に私の知り得た処を整理する。

(1) 唐草双鸞俊狛背八稜鏡 (京都市伏見区深草藪ノ内町稻荷大社 撰社東丸神社蔵)

徑二一・八釐。素円鈕の四方に右方へと向う鸞と俊狛を

交互に置き、一方鈕の外周部から伸びた瑞果文唐草が間隙を填め、外区は八稜形を成し、八方に花卉を配して、意匠は極めて優秀である。ただ正文の表面が著しく漫漶なのは、鑄型の不良の故よりは寧ろ或る時代に火中した為と思われる。箱裏書によれば、此は古来三ヶ峯頂上二ノ峯神殿の御霊代であつたが、応仁の乱の兵火によつて社殿は烏有に帰し、鏡は土中に埋没してしまつた。それを明応年中に土民某が偶然に掘り出して稻荷社へ奉納した。以来稻荷の禰宜職であつた荷田家の重宝として伝えられたものと云う。この伝を一応信ずるとすれば、この鏡は稻荷信仰の中心を成すものであつたことが窺われ、秦伊呂具が初めて稻荷山頂に神社を創めたと言われる和銅三年を、とりわけ下つたものと考えれば、案外無い物かもしれない、この種の唐鏡式としては、伝来に確實性を含んだ貴重な例と云うことが出来よう。|| 参照・景山春樹氏「山城考古展の新資料」(中述と美術二四二号)

(2) 伯牙弹琴背八花鏡 (大阪府南河内郡道明寺町土師神社蔵)

徑一四・一五釐。主要な背文は美濃長瀬山出土の物と全く同一なので、ここに再説はしないが、彼が円鏡であるに對して此は八花鏡であり、その上に彼にあつた銘帯が此には無い。此が長瀬山鏡より三釐程小さいのも、丁度銘帯の巾だけ徑が足りないものであつて、両者の生成過程が全く無関係ではないことが察せられる。この八花鏡は同種の物が二、三発見されているし、中国の出土品もある。本邦発見の物については後に述べる。なを、この鏡

と神社との関係は確実な徴証が無いが、一説に神社附近から出土したものでないかとも云われる。|| 参照・後藤博士考雜21の12論文

(3) 伯牙弹琴鏡 径一七・〇糎

(4) 花枝双蝶八花鏡 径約七・三糎

(5) 双鸞俊狛背八花鏡 径九・四糎

(6) 双鸞俊狛鏡 径九・一糎

(7) (8) 唐草飛禽八稜鏡二面 径九・一糎

(9) (14) 禽獸葡萄鏡六面 径約六糎

(15) (19) 素文鏡五面 径四・五糎内外

(以上、三重県志摩郡神島八代神社蔵)

神島は伊勢湾の略中央に位する全くの孤島であるが、そのような島にかくも多くの唐式鏡が存在するのは極めて異例である。梅原博士の報告に従うと、此等は島内各地から出土した物を集めたのではないかと考えられ、とすれば、この一介の孤島が、九州宗像の沖ノ島に似た、唐式鏡による祭祀遺跡ではないかと想像されて非常に興味深い。神社には、外に漢式鏡や須恵器等も蔵しているとのことであるから、その感はひとしを深い。唐式鏡自体も極めて面白いもので、伯牙弹琴鏡は美濃長瀬山、三河西幡豆、前橋八幡宮等各地に同范品があり、花枝双蝶八花鏡は、下地素文、やや大型の物に属し、此は先にも述べた静岡県葉梨村出土鏡と同范と思われる。(5)と(6)も、同范品の一方を葵花式、他方を円に造ったことは略確実

で、横浜日吉町、静岡県袋井からも同范品が出ている。(7)と(8)も此又同范で、更に六面の禽獸葡萄鏡が全て同范と考えられる上に、山城周山廃寺出土の一面も同范か。

と博士は述べられている。又素文鏡も三河西幡豆出土の物と関係あるものの如く、このように、絶海の小島に存する鏡が日本各地の鏡に継がりを持つこの一点を取り上げて、奈良朝鏡鑑史上忘れられることの出来ぬ重要な事例である。|| 参照・梅原博士古代学1の3論文

(20) 花枝双鳳八花鏡 (三重県桑名郡多度村多度「山ノ神」址出土)

現物は早く所在を失ったと云うが、梅原博士によれば播磨金谷、近江南滋賀等から出土した物と同范ではないかと云われる。同所より高坏を伴出したと云う。祭祀遺跡であろうか。なを、多度神社と鏡とは相当に密接で、現に神社には三十面の和鏡があり、後にも触れるが、彼の多度神宮寺資財帳にも、信仰内容を持ったと思われる唐式鏡が多数記載されている。|| 参照・梅原博士史迹と美術二〇一号論文

(21) 鸞獸葡萄鏡 径二九・五糎

(22) 伯牙弹琴鏡

(以上、千葉県香取郡香取町香取神宮蔵)

(21)は特に優秀な白銅鏡で、唐よりの舶載品である。正倉院蔵の一面と同范であることは殊に有名である。外縁部に見事な飛雲を繞し、外区は例の如く葡萄唐草と鳥獸で填めている。内区と外区を分ける界線の外周に細く中区

を設けているが、外区の唐草の一部が低い圈を越えて中区に及び、その空間を飾っている。内区は、大きな獣鈕を中心に、その周囲に主要な怪獣は八匹居るが、それぞれに二、三の兎獣がまつわっているので獣の数は多く、

- しかも各々が自由自在の姿体で躍動している。そのモデリングの適確さ、細部表現に尽された彫技の卓拔さ等非の打ち所が無く、豊麗優雅、この種の鸞獸葡萄鏡中でも取り分けすぐれた逸品である。なを、伯牙彈琴鏡も美濃長瀬山、三河西幡豆、志摩八代神社、前橋八幡宮等と同一背文と云われる。|| 参照・日本国宝全集第六巻、天平地宝
- (23) 伯牙彈琴鏡 (前橋市連雀町八幡宮蔵)

径一七・二糎。同宮境内より出土したと云う。同鏡品は前記(22)、第一章(8)等、その外非常に多い。|| 参照・天平地宝

- (24) 月宮背八稜鏡 (群馬県北甘楽郡一宮町貫前神社蔵)

径二〇・六糎。内区の中央に月の桂が生え、鈕の上方部はその枝葉の繁茂によって填められている。幹の向って左の空間部に嫦娥、右方に靈葉を搗く月兔、及び蟾蜍が居る。八稜形の外区には、八個の飛雲を置く。此も舶載品であろう。此と同一背文による中国出土品を、金沢の東馬三郎氏が所蔵されている。ただ、この鏡が何年頃から社宝となったものかは明らかでない。|| 参照・日本国宝全集第二十二巻

- (25) 蔓草麟鳳鏡 径一七・〇糎

- (26) 飛雲花喰鳥八稜鏡 径一八・〇糎
(27) 鳥獸葡萄鏡破片

(以上、日光市中宮祠二荒山神社蔵)

これ等は男体山々頂遺跡の出土品中に含まれている物である。尤も例の遺跡は仏教的色彩が濃厚であるが、それが元來純仏教的信仰の遺跡とは考えられず、その根底には往古以來の素朴な山岳信仰があるものと考えられて良

いから、此の諸鏡も一応神祇の項に含めたのである。(25)は素鈕のの左右に双鸞が対し、上方に雲氣火焰を伴う靈獸が右方へ馳駆し、下方には三方に若葉を出す一本の唐花を表して、中央の花には鳥が一羽とまつている。図紋

としても通有の感を免れず、文様自体も甘く、鏡胎の質も粗いように見受けられて、本邦の製品たるを思わしむるが、此と同鏡品が備後津ノ郷から出土している。(26)は

内区に、八葉連華座鈕の四方に華綬を喰む鳥を四方に配し、外区に八個の飛雲を配列している。細部に和風化の痕が著しく、純然たる本邦製品で、製作年代も平安朝に下るものであろう。(27)は四分ノ一程の破片で文様も特に

云うべき処はない。|| 参照・古谷清、丸山瓦全阿氏「日光二荒山頂上発見品に就て」(考古学雑誌14の10) 及丸山氏「続日光二荒山頂の発見品に就て」(同14の12)、天平地宝

- (28) 鸞獸葡萄鏡 (愛媛県越智郡大三島大山祇神社蔵)

径二六・八糎。すこぶるつきの優品で、疑もなく唐よりの舶載品である。外縁には忍冬文風のやや古式の唐草が繞る。外区はまず通有、突帯の外周にある中区には特殊

な幾何学的な雲気文かと思われる文様が連続されている。内区は獸鈕の上下に二匹づつの獸が居り、鈕の左右には孔雀が二羽づく組み合されている。獸や孔雀の表現その物は自然自由な趣を持つが、全体の布置は対称的構図を厳守し、葡萄唐草の蔓の波動、その谷々に交互に配された果房と葉も規則的なリズムに乗っている。あまつさえ、他の葡萄鏡によくみられる、外区の蔓が突帯を越えて内区に及ぶと云う自由性はこの鏡にはなく、内区は内区、外区は外区で文様を完結させている。外縁部や中区のやや古式な文様をも考え合せる時、その背文の整然たる処、正倉院藏や香取神宮藏の鏡よりも様式的には遡るものと考えられる。|| 参照・日本国宝全集第四十五輯

(29) 鳥獸葡萄鏡 (福岡県宗像郡玄海町宗像神社辺津宮藏)
詳細は聞知しないが、彼の「沖ノ島」の報告書にその存在を触れている。

- (30) 海獸葡萄鏡 径一・九糎
- (31) 海獸葡萄鏡二面 径約一〇・七糎
- (32) 海獸葡萄鏡 径九・八糎
- (33) 海獸葡萄鏡 径一一・二糎
- (34) 海獸葡萄鏡 径五・八五糎
- (35) 唐花唐草文六花鏡 径約九・一糎
- (36) 伯牙彈琴鏡 径約一六・九糎

- (37) (38) 花枝双鳥八花鏡 径一・六糎
 - (39) (40) 花枝双鳥八花鏡 径一・六糎
 - (41) 花禽双鸞八花鏡 径一一・九糎
 - (42) 花禽双鸞八稜鏡 径一三・〇糎
 - (43) 花枝双鸞八花鏡 径一二・六糎
 - (44) 双鸞狻猊背八花鏡 径一〇・一糎
 - (45) 双鸞狻猊背八花鏡 径九・七五糎
 - (46) 双鸞狻猊鏡 径九・三八糎
- このように、はるか九州の辺地にかくも多数の唐式鏡が藏されていることは、極めて大きな謎であると共に、此等の多くが日本各地に出土、或は伝世する鏡の中に同文様の關係を持っている。(35)は志摩八代神社に六面、山城周山麿寺、大和金峯山経塚に各一面、更に石野博信氏の教示によって撰津宝塚市中山出土の一面を最近知った。都合九面の同文品がある。(36)は東大寺大仏殿鎮壇具、及正倉院藏、更に東京国立博物館所藏の物と共通し、(37)は此又日本各地に同類品がある。花枝双鳥八花鏡も大津市南滋賀、播磨金谷出土と同文、(41)と(42)は同背文の物の一方を葵花式、他方を菱花式に造ったもので、鈕の左右に合綬の双鸞が対し、鈕の上方に瑞花、下方に小禽を表す。此を内区として周囲の外区には飛雲文を置き、内外両区の地は魚々子地とする。同文品が大和の見瀬丸山古墳と大分県速見郡立石町向野字津波戸山から出土し、魚々子を打たぬ素地の優品が住友家等に藏されている。(44)から

(46)までも全く同文で、鈕の左右に鸞、上下に疾駆する狻猊を配する。この鏡式の物が数まで同じうして志摩八代神社にあり、又、八花鏡の方は静岡岡袋井と横浜日吉町より出土しているが、神門神社の例は純然たる伝世鏡で、その内の一面は、鍔上り、金質共に良い。|| 参照・岡崎讓治氏「神門神社鏡とその同文様鏡について」大和文化研究第五卷九号

(47) 鸞獸葡萄鏡 (奈良市春日野町、春日大社蔵)

径二九・五釐、外縁には雲花文を置き、内外両区の葡萄唐草も通有であるが、突帯上に珠文を打ち、内区の疾駆する獸の間に、二羽の孔雀を正面向に飾ったのは珍しい。表現は極めて鮮明、優秀な白銅鏡で、恐らく舶載鏡であろう。これは近年まで末社金竜社の御霊代であったと云う。一説に後醍醐天皇の御下賜と云われるので、社宝になったのは相当後年のこととなるが、春日大社の歴史からすれば、かかる唐式鏡が古くから御霊代として祀られることは、当然あったと考えて差支無いであろう。

|| 参照・保坂三郎氏「古鏡」昭32刊

以上の鏡は、その神社の所蔵になった伝来の明確な物が少ないので、それを直接に神社の由緒と結びつけて奈良時代神祇鏡の性格を考えることは、未だ相当の危険を伴うことになる。又、所謂伯牙弹琴鏡の大半が神社に所蔵されていること、同じ双鸞狻猊鏡が同数八代神社と神門神社に分有されている等、鏡式と御霊代との関係の有無にも問題がある。しかし、次のことはまず誤り無いと思う。

大化前代に於ては、鏡が各氏族の族長達によって所謂神宝として厚く秘蔵されていたらしいことは記紀によって窺われるが、その漢式鏡も、結局は族長の死と共に古墳に副葬される運命にあったようである。従って、現存する漢式鏡の殆んどが古墳からの出土鏡であり、所謂祭祀遺跡にさえ鏡の出土は殆んど認められず、宗像神社の沖ノ島遺跡や大和大神々社の遺跡等は、やや例外に属する。まして神社の御霊代として最初から今日迄伝世された漢式鏡は、極めて稀である。それに対して、鏡が神社に長く伝世されると云う歴史は、少なくとも唐式鏡に始まると云い得るのではなからうか。和鏡になれば、その伝世は当然のこととなる。

従前の祭祀は、日本各地に発見されている祭祀遺跡より考えるに、或る特定の聖地の存在は確かであっても、特に社殿は無く、祭に際しては、その時々(4)に種々の作物によって神を迎え、祭祀を行っていたようである。そして、所謂現今の神社形態の萌芽が明確化して来るのも、矢張り奈良朝以後と考えられよう。従って、我固有信仰の中に生きた唐式鏡がかかる神社に伝世されて来るのは、我古代神道の新しい発展と、当時の最も新しい文化を背景とする唐式鏡が、矢張り或る信仰上の結びつきを持った結果ではなからうか。尤も、先に上げた事例の中に、祭祀遺跡の出土かと疑われる物が含まれているのは、当時に残る伝統的祭祀様式の内にも、この新様式の鏡が撮取されていた事実を示すものかもしれない。

しかし何れにしろ、漢式鏡が古墳に副葬されたのに、唐

式鏡が所謂死者との結び着きを断ち、別に神として祀られる物となった処に両者の本質的な相違が認められ、この事實は、次の仏教と唐式鏡との關係を考察するに当り、その精神的前提として注目しておかねばならない。

(註)

1 平安時代には少くとも、稻荷社にも御霊代の鏡があつたことは百練抄の記事に明らかである。

(寿永二年八月廿一日冬、武士乱入大原野、打開神殿、取御体鏡四枚并神宝等。稻荷社奉取御正体一弁之。

又二峯即ち中社の御神体が古くから鏡であつたことは、惠慶が稻荷社の中社を詠じた和歌に、

いなり山三つ杉中にます鏡、我ことだて、頼むかひあれと云うのがあるによつて知られる。従つて、この伝が全く根拠の無いものでは決してないと思われる。

2 なを土師神社では、銀装革帯、玳瑁装牙櫛犀角柄刀子、青白磁円硯、牙笏等と共に、菅公の御遺愛品と伝えている。

3 唐鏡大鏡

4 大場磐雄博士著「神道考古学論攷」参照

第三章 仏教と唐式鏡

唐式鏡が従来の漢式鏡と全く區別されるべき新領域、それは仏教寺院である。唐式鏡が寺院で如何に用いられたか。以下にその実例を概観しよう。

(1) 正倉院御物諸鏡

此等の鏡は、云う迄もなく光明皇后が聖武天皇の御遺愛

(57)

唐花唐草文背金銅貼鉄鏡 (大津市滋賀里町長尾崇福寺塔址出土・近江神宮藏)

径七・〇厘の小鏡である。此が彼の舍利容器と共に伴出した物として有名である。中央に蓮華座鈕があり、その周囲に忍冬文とも宝相華とも見える特殊な唐草を四方に配している。その下地には魚天子が打たれている。鏡の形式は一応本期の唐式鏡のそれと認められるが、この唐草が奇妙に古様、稚拙の感無きにしてもあらず、吾邦の仿製鏡と観る説の出た所以がある。崇福寺は天智七年の創建と云うから、唐式鏡の確実な使用時期の知られる現存

最古の例と考えられる。|| 参照・梅原末治博士「近江滋賀里崇福寺の塔址」(宝雲33・34)

(58) 鳥獸葡萄鏡 (奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺五重塔心礎裡納)

径一〇・一釐。先に行われた五重塔の空洞調査に於て、舍利容器と共に発見された物。内外両区に分れ、外区の唐草も規則的に波動し、各谷に果房と葉を交互に入れ、処々に小禽が居る。内区も外区と同様の葡萄唐草が繞り、獸鈕を周って五獸が一斉に左方へと疾駆している。此と同範品が中国の陝西方面より出土していると云うから、舶載鏡であろう。|| 参照・「法隆寺五重塔秘宝の調査」参照

(59) 鳥獸葡萄鏡 径二三・五釐

(60) 槃竜背八花鏡 径二七・五釐

(61) 伯牙弹琴鏡 径二七・九釐

(62) 海磯鏡二面 径四五・五釐

(以上、東京都台東区上野公園国立博物館)

この五面は共に法隆寺献納御物であった。(60)は素円鈕を周って一匹の竜がうねり居り、鈕を竜が口に喰む玉にみたててある。(61)は従来説いて来た伯牙弹琴鏡とは全く異っている。鈕の下方には他を前に左右二高士が坐し、左方が琴を弾じ、右方の膝前には香炉がある。二高士の両外脇には対称的に奇岩が立つ。鈕の左右には竹が生え、鈕の上方中央に一堂が建ち、その上方に左右対称に二羽の雁と飛雲、遠山等を表している。極めて絵画的ながら

きっちりとして左右対称構図を追っている。外区の銘帯には左の詩がある。

独有幽棲地。山亭暗女蘿。潤清長低篠。池開半卷荷。

野花朝暝落。磐根歳月多。停杯無管慰。峽鳥自經過。

海磯鏡は外周より鈕へ向って四岳を突出させ、その間を海波で填めると共に、二ヶ所に舟遊人物を表す。二面共背文は酷似してはいるが、舟遊人物や仙岳斲法に多少の異同があつて、必ずしも同範とはみなされない。この二面の海磯鏡は、法隆寺資財帳により、天平八年に光明皇后が法隆寺の丈六分として奉納された物であることが明らかである。五面とも優秀な白銅鏡で、舶載品であろう。

(64) 唐花唐草文六花鏡 (奈良市雜司町東大寺大仏殿基壇出土・東大寺藏)

径九・五釐。蓮華座鈕を周って一種の草花を唐草風に連続させたもので、下地に魚天子がうたれている。正倉院と神門神社に同範品のあることは先にも述べたが、此が鎮壇具中の一品であることが注目される。|| 参照・東大寺大鏡第十二冊

(65) 瑞花双鸞八花鏡 径一五・四釐

(66) 花枝双蝶八花鏡 径六・九釐

(以上、奈良市登大路町興福寺金堂基壇出土・国立博物館藏)

共に鎮壇具の例で、(65)は鈕の左右に対向する双鸞、上下に牡丹風の瑞花を置く。香川県大川郡長尾町極楽寺藏鏡は背文が同一である。(66)は正倉院と、秋田四ツ小屋村出土と同範なること先の通り。|| 参照・興福寺大鏡

(67) 唐花唐草文八稜鏡 (奈良市雜司町東大寺法華堂本尊不空羅索
觀音像宝冠嵌裝)

徑五種。宝冠内側の頂部に附けられているものと云う。

素円鈕の周囲に宝相華文風の文様を連ねる。|| 参照・保坂
三郎氏「古鏡」

(68) 龜鈕飛天十二支文鏡 徑一四・五種

(69) 鳥獸葡萄鏡 徑一三・六種

(以上、奈良市雜司町東大寺東南院宝库藏)

此等は共に法華堂の天蓋裝飾鏡であつたと伝える。(68)は
円形の鏡背に三重の方格を作り、内側第一重は鈕座区で
中央に龜鈕がある。第二重には八個の子葉文を布置して
それぞれ一字宛の文字を入れ、第三重目は四隅が外縁に
接し、内に十二支獸がある。この方格四辺の外側に生じ
た三日月形の空間に飛天を表している。この鏡は我邦の
踏返品であろうと云われるが、これに極めて酷似した鏡
が、北京の梁上椿氏藏中にある。(69)は普通の物である
が、ただ中央の鈕の獸が首を上げて左上方を仰ぐ体なの
は珍しい。背文漫漶で此も踏返と観られるが、此の同一
原形品と思しき物を大阪府吹田市山田町上の吉田誠雄氏
が所蔵されていることを最近知った。|| 参照・東大寺大鏡
第十二冊、広瀬都巽氏「法華堂天蓋裝鏡について」(寧楽四)

(70) 瑞函鏡 (福岡県筑紫郡太宰府町觀世音寺藏) 徑二〇・〇種。

未だに天蓋光心に着鏡されたままで残つた貴重な例であ
る。鈕を仙岳に作ると共に、四方に山岳を屹立させ、間
に波文を入れた一種の海磯文を鈕座とし、四岳の頂上に

雲文を置き、その間に二匹の龜と靈獸を交互に入れてい
る。以上を取り巻いて珠文帯がある。その外側に「鳳凰、
嘉木、合歡蓮、比翼、連理竹、金勝、同心鳥、嘉麦、嘉
瓜、比目魚、連理樹、合璧」の文字と図紋を繞し、更に
外縁に接する一帶に、「禽、獸、魚、竹、草、樹、合璧、
金勝、並、出、瑞、函」と書し、字間に十二支肖を挟ん
でいる。大和金峯山経塚より同鏡の破片が出土してい
る。|| 参照・觀世音寺大鏡

(71) 素文鏡 (奈良市西ノ京町薬師寺藏)

本鏡は昭和三十年十二月、有名な金堂の文六薬師如来の
修理中、台座の中から他の若干の遺物と共に発見された
ものである。私は奈良博物館で催された「天平地宝展」
に於て知見を得た。

(72) 仙岳飛天双鸞鏡 (奈良市横井町横井磨寺金堂址出土)

鎮壇具中の一品で、徑一四・五種、鈕の左右に双鸞、上
には飛天、下には仙岳を表し、仙岳の左右から雲氣の立
ち昇るのは特色ある図柄である。一面に縁青を吹いてい
るが、文様の鑄上りは素晴しく、我国出土鏡中での逸品
に数えられる。恐らく舶載鏡であろう。随伴遺物に銅鏡
殘欠、和銅開珎、万年通宝、隆平永宝、釘等あり。|| 参
照・榎本龜生氏「大和添上郡発見の金銅仏等について」(考古学
雜誌17の5)

(73) 海獸葡萄鏡 (奈良県五条市西久留野出土)

徑一二・一種。内区は獸鈕の周囲に五獸が馳駆し、外区
に飛禽をあしらつた葡萄唐草が繞り、外縁部にも小花文

を連ねる。背文は西波豆出土鏡と同一で、当方が心持小型か。附近一帯より奈良朝後期の瓦を出し、寺院址かと云うが、確証は無いもよう。|| 参照・上田三平氏「大和にて発見の海獣葡萄鏡」(考古学雑誌16の6)、「天平地宝」

(74) 海獣葡萄鏡 (京都府久世郡城陽町井手、井手寺址出土)

径一三・三糎。表面は荒れているが、元は相当優秀な鏡であったことが偲ばれる。隆平永宝が共に出土し、又附近に礎石残欠もあり、奈良朝の蓮華文鏡瓦が発見されている。|| 参照・京都史蹟勝地調査会報告第四冊。

(75) 瑞花双鳳鏡

径九・五糎

(76) 海獣葡萄鏡

径五・九糎

(京都府北桑田郡京北町周山、周山廃寺出土)

西堂址より出土、両面共に極端な粗悪品で、図紋も根本的な写し崩れがあつて不明瞭であるが、山間僻地での仿製鏡と観れば、かえつて興味深いものがあるかもしれない。|| 参照・石田茂作博士「丹波国周山廃寺」(考古学雑誌45の2)

以上の如く、唐式鏡にあつては、かえつて仏教との関連に於て用いられる鏡が一番多いと云う結果となつた。そればかりではない。一般史料に現れる例をも加えると、実に千幾面と云うこの種の鏡を見出すことが出来るのである。この事は別に稿を改めるが、兎に角、唐式鏡の本質的な精神的意義は、この仏教に用いられた鏡の内こそ問われねばならないと信ずるものである。

なを、この唐式鏡が和鏡全盛期の藤原時代にまで伝世さ

れた上で、改めて仏教法具に造り直されたり、関係遺跡に埋納された物がある。前者は、鏡の表面に仏像を毛彫に表した所謂鏡像が主なる物で、後者は経塚埋納鏡である。今回とは直接の関係はないが、取敢ず触れておくことにしよう。

(1) 鸚鵡華綬八花鏡 (京都市伏見区醍醐加藍町醍醐寺藏)

径一七・七糎。鏡背に「仏師雲上」の銘あり。表面の如意輪観音四天王鏡像は、精緻細密の極を尽して余す所がない。保坂三郎氏は、この鏡像を中国の作とさえ考えておられる。|| 参照・保坂三郎氏著「古鏡」創元社刊

(2) 花文鏡 (秋田県仙北郡長野町大字上鷲野出土、富岡喜一氏藏)

断片で図像も不明、左記の銘を持つ。

長元四年七月十三日「公富岡」女□真末古公夏虫

(3) 鸚鵡華綬鏡 (鳥取県東伯郡三朝町、三仏寺藏)

|| 参照・深沢多市氏「長元紀年鏡に就いて」(考古学雑誌15の11)

径二七・九糎。表面に胎藏界中台八業院を線彫に表すが、出来栄はさまで良くない。図像の脇に次の銘あり。

長徳三年九月廿七日奉造……女弟子平□本願也。

(4) 瑞図鏡片

|| 参照・日本国宝全集第六十七輯

(5) 双鸞鏡片

縦一一・二糎

(6) 葡萄鏡片

横一〇・八糎
現存部弦長 三・七糎

(7) 小葡萄鏡

径五・六糎

(以上、奈良県吉野郡天川村洞川、金峯山経塚出土)
この内(4)は宝幢如來の鏡像である。|| 参照・「金峯山経塚遺物の研究」

(8) 蔓草麟鳳鏡 (広島県沼隈郡津ノ郷村出土、井上嘉太郎氏蔵)

径一七・〇糎、類品が日光二荒山からも出土している。
本鏡には優秀な阿弥陀如來坐像が刻まれ、藤原らしい典雅さを観せている。|| 参照・梅原末治博士「本邦出土に係る唐式鏡の新資料」(史迹と美術二〇一号)

(9) 唐花鏡 (岡山県上房郡有漢町、マゴロ経塚出土)

径一八・三糎。経筒、懸仏、松喰鶴鏡等と共に伴出。背文は八花文座鈕の周囲に花卉と花枝を交互に配している。表面に毛彫で胎藏界中台八葉院を表す。|| 参照・後藤守一博士「本邦出土の唐式鏡」(考古学雑誌21の12)

(10) 伯牙弹琴鏡 (福井県今立郡上池田村常安出土、宮本積氏蔵)

一七・〇糎。三河西波豆、美濃長瀬山鏡等と同類。道路工事中に出土したものと云い、鏡面にも仏容は見当らないが、縁に近く上下に二孔が穿たれているので、元は仏前に垂れ下げたものと思われる。|| 参照・梅原博士史迹と美術誌二〇一号論文参照

(11) 花禽双鸞八花鏡 (大分県速見郡立石町向野字津波戸山出土、東京国立博物館蔵)

径一一・三糎。類品が、大和の見瀬丸山古墳から出土し、神門神社にもある。経塚遺物と聞いている。

(12) 唐草双鸞八花鏡 (千葉県香取郡滑川町経塚出土)

詳細は知る処が無いが、矢島恭介氏が「唐鏡の形態につ

いて」(考古学雑誌34の6)の中に触れておられる。その拓影によれば図紋の鑄成は殊の外見事で、舶載鏡の疑もある。

第四章 その他の鏡

唐式鏡の場合、出土遺跡の性格が明らかでない為に、鏡の歴史上に果たした機能的役割が十分解明されていないものが多い。それ等をこの章で一通り述べて今後の参考に供したいと思う。

(1) 花禽双鸞八花鏡 (奈良県橿原市見瀬丸山古墳出土、京都大学蔵)

径一二・五糎。鈕の部分は欠損しているが、双鸞対向文の外、鈕の上部に瑞花、下方に小禽を表し、外区に二種の飛雲を交互に繞す。なを地文として細かな珠文を点じている。かなり粗成品で、大分県速見郡立石町の津波戸山経塚から同文鏡が出土し、神門神社にも同じく一面が蔵されている。なを珠文を打たない優秀品が住友コレクションの中にも観られる。本鏡は丸山古墳の前方部から出土し、末永博士が京大に齎された物で、勿論丸山古墳の副葬品との関係はない。|| 参照・梅原博士「史迹と美術二〇一号論文」

(2) 伯牙弹琴背八花鏡 (奈良県五条市附近出土、奥井吾良氏蔵)

径一六・六糎。次に述べる山城埴田出土鏡や河内土師神社鏡と全く同形式で、中国にもこの例は十分に知られている。|| 参照・梅原博士古代学誌論文

(3) 伯牙彈琴背八花鏡 (京都府相楽郡山城町埴田出土、和伎坐天夫支禿神社藏)

四分ノ一程の断片、蟹濤寺近くの工事現場から発見され、現在所蔵している神社とは関係は無い。|| 参照・梅原博士史迹と美術二〇一号論文

(4) 鸞獸葡萄鏡 (大阪府吹田市山田町上吉田太郎氏藏)

径一三・八糎。東南院宝庫の旧法華堂天蓋装鏡と同一文様。少なくとも原型は一つの製品であろう。|| 参照・拙稿「大阪府吹田市山田町上出土鸞獸葡萄鏡について」(大和文化研究 6の5)

(5) 海獸葡萄鏡

径九・五糎

(6) 海獸葡萄鏡

径一二・〇糎

(以上、和歌山県北牟婁郡錦村発見)

(5) は大和松山の古墳から出た物と同文で、鈴木敏雄氏藏。

(6) は錦村小学校藏。明治十二年頃浜で漁夫の網にかかった物とのこと。|| 参照・後藤守一博士考古学雑誌21の12論文

「天平地宝」

(7) 宝相華文八花鏡

径一七・八糎

(8) 伯牙彈琴鏡

径一七・四五糎

(9) 海獸葡萄鏡

径一三・六五糎

(10) 素文鏡

(以上、愛知県幡豆郡幡豆町西幡豆出土、宮内庁書陵部藏)

(7) は鈕の周圍に宝相華唐草を配した物で漫滅が激しい。

東京国立博物館や住友コレクション中にも優秀な中国鏡があり、此は本邦の踏返品。(8) は同文品が日本各地から

出土している。(9) は大和五条市西久留野出土と同文。素文鏡も八代神社に類品を觀る。一括して土壙の中から発見されたと云うが遺跡の性格は不明。|| 参照・後藤博士考古学雑誌21の12論文、「天平地宝」

(12) 海獸葡萄鏡 (同右出土、岡崎市某氏藏)

径一三・〇糎。|| 参照・同右

(13) 海獸葡萄鏡 (三重県多気郡斎宮村金剛坂出土、鈴木敏雄氏藏)

径八・九五糎。天平地宝による。

(14) 唐草四獸鏡 (佐伊賀国出土、東京国立博物館藏)

径一三・八糎。所謂隋系の鏡で、外縁や界圈の内側に鋸齒文を連ねる小帯を繞し、内区には大きな鈕の周圍に古式の四獸が駆け、獸と獸との間に抽象化された唐草の單位文を置いている。外区は銘帯となり、左記の詩句を刻んでいる。

王匡□開鏡□灰我去塵光如□月水□□山辺□□
参照・天平地宝

(15) 海獸葡萄鏡 (宝塚市中山出土)

径五・六糎。石野博信氏の教示による。文様は殆んど形を留めぬ迄に崩れ去っている。周山麿寺、大和金峯山等の出土鏡と同類で、特に八代神社鏡とは同范の疑すらある。此は須恵器窯址の崩壊土層に混じて発見されたと云うが、窯との関係は明らかではない。

(16) 草花麟鳳八稜鏡 (長野県諏訪郡神宮寺村虚洞沢出土、諏訪神社藏)

径二五・八糎。内区は獸鈕の周圍に飛雲、唐花、麟鳳等

を華やかに配し、外区にも飛雲や飛禽を加えた複雑華麗な鏡で、篋彫の技法や鳥獣の肉附が生硬な点本邦の製品ではないかと疑う説があるが、我国製作の唐式鏡としては第一級品であろう。寛政十二年に三郎兵衛なる者が発見したものと云う。|| 参照・後藤博士考古学雑誌21の12論文、「天平地宝」

(17) 双鸞狻猊八花鏡 (静岡県磐田郡袋井町愛野字腹摺出土、山崎常磐氏蔵)

径九・一糎。次に説く箕輪出土鏡や八代神社、神門神社の鏡と全く同形。|| 参照・同右

(18) 双鸞狻猊八花鏡 (横浜市神奈川区日吉町箕輪出土、三田史学会蔵)

径九・六五糎。(17)と同文。|| 参照・同右

(19) 海獸葡萄鏡 (群馬県多野郡平井村白石出土、落合熊之助氏蔵)

径一一・五糎。文様は普通であるが、界圈に葡萄の蔓が巻きつく意匠は、本邦出土鏡としては珍しい例で、その点撰津吉田氏蔵鏡や東大寺東南院鏡と似ている。|| 参照・「天平地宝」

(20) 槃菟八花鏡 (別府市西小学校蔵)

径一二・四糎。一部に欠損あり、鈕を挟んで双菟が対し空間に飛雲を点じた物。出土地は不明。|| 参照・梅原博士古代学1の3論文

(註)

この章の文中住友家藏品については「泉屋清賞」を参照、東博蔵については岡崎讓治氏の教示による。

第五章 本邦唐式鏡の相互関係

我国に於て唐式鏡が行われるようになるには、先ず唐から彼地の鏡を輸入することから始まることは論を待たない。その輸入の状況について次のような事柄が認められるのではなからうか。その第一は、唐に於て変遷する様式の順序通りに、それ等の鏡が次々と我国に到達し、我国の唐式鏡も年次を追ってその通りに様式の推移を觀た。等とは到底考えられないと云うことである。例えば福島県郡山市大善寺古墳から隋系の方格四神鏡が出土したからと云っても、その古墳が他の奈良朝墳墓の何よりも一番古いと考えられる証拠は無い。特に、現在唐式鏡使用の推定年代としては最古と考えてよい天智七年の崇福寺塔址出土唐草文金銅貼銀縁鉄鏡は、その唐草に多少奇古の風趣を残しながらも、鏡の形式その物は隋系どころか純然たる唐鏡のそれである。唐鏡自身にしても、様式が本当に確立するのは高宗後半期から則天時代と推測されているのであるから、日本に唐式鏡が伝えられた時期が天智七年をはるかに遡るとは考えられない。故にその当初に於て既に日本では完全な唐様式を会得したことになる。この事は、我奈良時代人は様式の新旧にこだわらず「唐鏡」と云う広い総括的な形式概念の下にそれ等の鏡を把え、且つ輸入していたことを意味し、仮に中国の唐鏡の様式変遷史が確立されたとしても、その尺度を日本の唐式鏡の年代の上いきなり当嵌めても全く無意味でしかないことになる。私は、我国の唐式鏡の

上にどれ程独自の一貫した様式変遷があったのかについて、多少の疑問を抱く一人である。

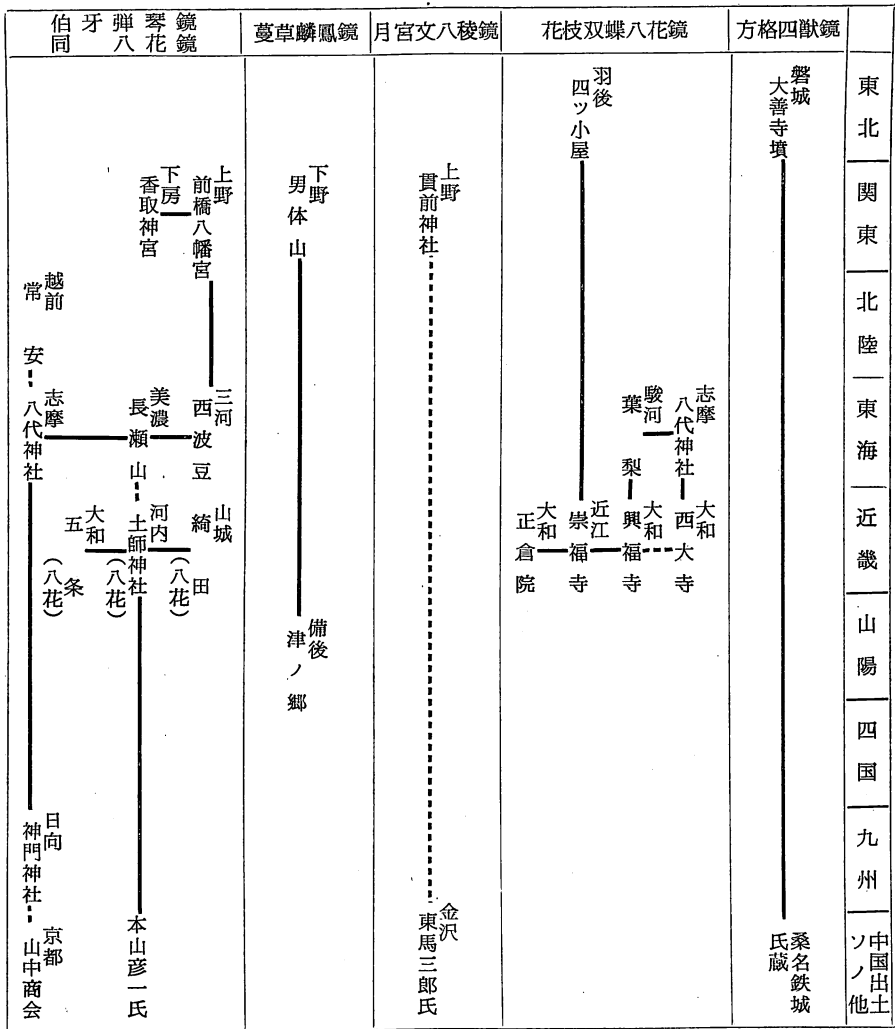
次に、こうして我国に輸入された唐鏡の数は恐らく我々の想像の域を超えていたと考えられるが、一方鏡の形式の面から観れば、その種類は比較的少なかったようである。

即ち鏡が輸入される際、一面々々相異なる形態や背面文様を選び取ったのではなく、彼地で同一の原形や鋳型から多量生産された一連の鏡を、何面も一括して購入すると云う手段が執られたようである。例えば御物海磯鏡二面は、その寸法や図紋の上に於て両者を見紛う程であり、正倉院蔵の鸞獸葡萄鏡と寸分違わぬ作品が香取神宮にあることは有名で、これ等はそれぞれ同一原形の作品が一組になって日本に舶載された好例であろう。又、中国で流布した伯牙彈琴鏡の背文の種類は実に様々で、一見全く同じような鏡でも、よく比較すると飛鶴や遠山、煙霞等の表現が異なっていて、矢張り互に別種の物と判明する場合が多い。ところが明かに舶載鏡である御物の一面を別とすれば、関東から九州に亘って各地に分布する我国の出土、伝世鏡は、形態が円か八花か、或は銘帯を持つか否かを除けば、背面文様はいずれも唯の一種類である。これは、唐から渡来した伯牙彈琴鏡はさぞ多かったであろうに、それ等の鏡は殆んど皆一連の同じ物であつたらしいことを物語っている。

これ等の鏡を範として我国で唐式鏡が製作される時、唐様式を模しながらも我国独自の意匠になる仿製唐式鏡が、果してどの程度に行われたのか分らないことが極めて注意

すべき事実である。この点、かえって漢式鏡時代の方が仿製鏡が盛で、内行花文鏡、方格規矩鏡や多くの神獸鏡にそれぞれ仿製品があり、家屋文鏡や直弧文鏡が、寧ろ古墳時代も比較的早い時期に製作されたのである。唐式鏡に全く仿製鏡が無かった訳ではなく、正倉院に四神鏡の下絵が残っているし、同じ正倉院御物の内の八卦十二支文鏡等は、略間違無く本邦の製作になる唐式鏡である。けれども、こうした少数の例を除く大半の鏡は、舶載鏡から直接に写しを取って造られた、所謂踏返品と考えられる物ばかりである。奈良時代に於ける唐式鏡の需要は実に激しいものであった。例えば大安寺だけで千幾面と云う唐式鏡を持っていた位で、註1その他各地の寺社や貴顕の注文は、ちよつと想像がつかぬ量に達したことと思われる。これに應ずる鏡の鑄工達は、一つ一つに意匠の考案をしていたのでは到底その需要に追い付くものではなく、いきおい最も多量生産の容易な踏返法を用いることになるであろう。しかもその製作法が慣習的に固定して来ると、最早鑄工達ほどのような好条件の下でも踏返品しか製作しなくなる。従つて中国とは異なる日本としての唐式鏡様式は増々成立基盤を失つて行くこととなるのである。

やがて踏返品はその又踏返しを生み、このようにして製作された鏡が日本各地に流布された時、全国の唐式鏡相互間に原形を一つにする姉妹關係が幾組も誕生することである。事実、今日学界に知られている本邦出土の鏡の中でそれが所謂踏返品と考えられる物程そのような關係が著し

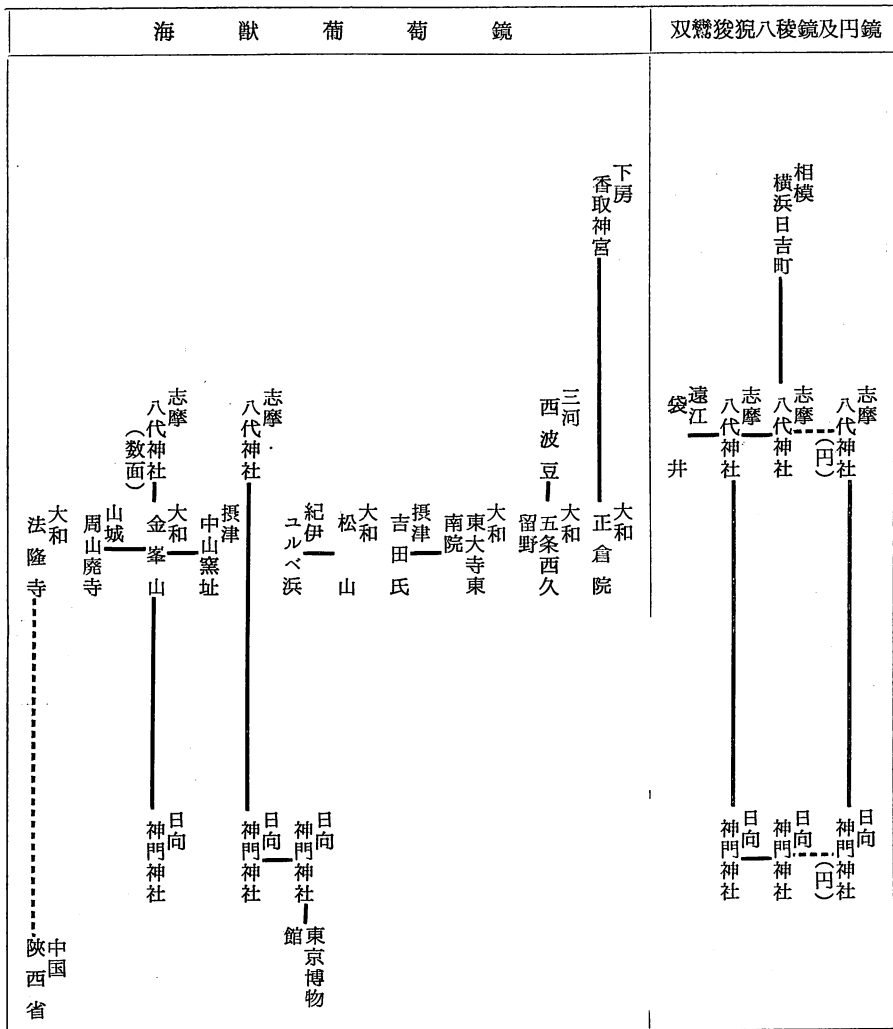


東北 関東 北陸 東海 近畿 山陽 四国 九州 中国出土
ソノ他

い。今私の知見に及ぶ範囲で図示してみても、上図のようなになる。

この図で、同形式の鏡が如何に全国的に分布しているかをよく諒解して戴けると思うが、その数は矢張り畿内、中でも大和が圧倒的に多いことが知られる。これは大和に始まった唐式鏡が、律令文化の地方への浸透が広まるにつれて、次第に遠隔地へと齎らされて行ったものではなからうか。

とすればこの鏡の中央から地方へ伝わって行く姿は、大化改新以後急速に統一権力を拡大して行った奈良朝廷政権の勢力状況を推測し得る可能性を秘めているのではあるまいか。小林行雄氏は、先に三角縁神獸鏡の同范鏡の分布を研究され、大



和朝廷が地方豪族に同范鏡を分与したと云う見解の下に、それが大和朝廷の勢力圏を示すものであろうと説かれたことがある(2)。この新しい方法論にはその後かなりの反省が加えられている模様ではあるが、それに近い方法を以ってこの唐式鏡を解釈し、妥当であるか否かを試みる余地があるので、はなからうか。いずれにしろ今後の研究にまつものではないが……。

なを、地方豪族が大和との交渉によって唐式鏡を獲得する場合、次の三つが考えられよう。(1)は当時としては最も貴重な舶載鏡を朝廷との交渉を通じて手に入れた場合で、香取神宮や大山祇神社の葡萄鏡は正にこれに該当するであろう。(2)は

唐草雙鸞鏡	唐草飛禽鏡	花禽雙鸞八花鏡	飛仙文鏡	海磯鏡	花枝雙鳳鏡	宝相華文鏡
唐草雙鸞鏡	唐草飛禽鏡	花禽雙鸞八花鏡	飛仙文鏡	海磯鏡	花枝雙鳳鏡	宝相華文鏡
稻荷山	志摩八代神社 志摩八代神社	大和見瀬丸山	大和正倉院 大和正倉院	大和正倉院 大和正倉院	伊勢多度 近江南滋賀 播磨金谷	三河西波豆
山城稻荷山		大和見瀬丸山	大和正倉院	大和正倉院		
住友家	住友家	日向神門神社 日向神門神社	寧楽美術館	寧楽美術館	東京博物館 中国出土	東京博物館 中国出土
住友家	住友家	日向神門神社	寧楽美術館	寧楽美術館	東京博物館	東京博物館

中央で造られた踏返品がその地へ流れて来た場合で、東大寺法華堂天蓋鏡に対する摂津吉田氏藏鏡は、この解釈の可能性を証しているのではなからうか。(三)は地方に伝わった唐式鏡を模してその地の鑄工が製作した場合で、周山麿寺出土の極めて粗悪な瑞花双鳳鏡等はこれに当るものと思う。(註)

1 大安寺資財帳参照。

2 小林氏「古墳発生の歴史的意義」(史林38の1)、「初期大和政権の勢力圏」(史林40の4)

結論

以上述べたことを取收ず要約する。我国に唐式鏡が行われるようになったのは、略天智七年を余り遡らぬ頃と考えられ、

以後律令制時代を通じて唐式鏡は漢式鏡に代わる新しい様式の鏡として全国を風靡した。さて唐鏡は、中国にあっては勿論整然とした様式の發展をみたが、日本ではいまわれわれのいわゆる「唐式鏡」と云う総括的概念の下に様式変遷の順序を超越して導入したために、この時代を通じて一貫した様式の体系が存在しないようであり、更に踏返技法の慣行が唐式鏡の日本的様式の成立をさえ阻んだ模様で、このように、唐式鏡を様式史の面から日本史的意義を追求することは、どうも無意味なように思われる。

次に、中国から唐鏡が輸入される時、一々別種の鏡を選ぶよりは同形式の鏡を何面も一組にして携り入れたように、この為唐式鏡は文様の種類が比較的少なく、或る限られた範囲に画一化され易い傾向にある。そのような鏡を次々と踏返して行けば、全国に同一原形が行き渡ることになるが、それは大和を中心に畿内の周辺地区に拡がり、やがて関東や九州の遠隔地に迄及んで行くもようである。その背景に律令政権の勢力發展が窺い得るのではないか。その地方豪族が唐式鏡を入手する経路に、大和から直接船載鏡の分与を受けるか、又はその踏返品を受取る場合と、伝わって来た唐式鏡を元に、その地方の工人に模倣させる場合等が考えられる。

では当時唐式鏡はどのような用途を持っていたのであるか。考古学的遺物の整理から帰納される処に依る限り、(一)古墳の副葬、(二)神社の御魂代、(三)仏教寺院の三種類が確実に知られる。ところが、漢式鏡の場合はその殆んどが

古墳の副葬品であり、常に死者とのつながりに於て意識されてきたが、唐式鏡では墳墓への副葬は殆んど無くなり、寧ろ神として永久に祀られる性格がはっきりと現れて来た。

しかも更に發展して仏教儀礼の中に迄唐式鏡が携り入れられて来たばかりか、この種の鏡の実例が一番多いと云う現象を示しているのである。そして、この寺院に祀られ、或は用いられた唐式鏡こそ従来の漢式鏡では及びもつかなかった全く新しい精神的領域であり、奈良朝唐式鏡の本質的な意義は、この寺院用鏡を研究してこそ初めて把握されるのではあるまいか。勿論、墳墓副葬鏡、特に神社の伝世鏡についても増々その研究が深められるべきであることは申す迄もない。又、私はここに墳墓、神社、寺院の三種の場合を指摘したが、一方遺跡の性格が不明瞭な鏡も数多いことであり、此等の鏡が更に再検討され、又新に別種の遺跡が発掘されて、より多くの用途が明らかになることを期待する。現に、宝塚市中山の須恵器窯址の上中から葡萄鏡が発見された事実は、この期待に希望を抱かせるものである。

以上私は唐式鏡資料の整理を下に、一つの問題提起を試みてみた。多少なりともその役目を果たす処があれば幸である。

なをこの稿は、関西大学末永雅雄、横田健一両教授の御指導を基とし、東京国立博物館中野政樹氏、奈良国立博物館岡崎謙治氏、それに奈良文化財研究所榎本杜人氏等より有形無形の御教示を賜わり、又毛利久氏、藤田カツ氏外京都博物館の方々、満岡忠成氏初め大和文華館の諸氏より参考文献について多大の御便宜を戴いて成ることが出来た。末筆ながら感謝の意を捧げる次第である。